

白石良夫著『かなづかい入門』について

上西俊雄

この本については三回書いた。話をきいただけで一度、読んでから一度、氏の駁論を読んでもう一度の三回であるが、書いたといふだけでいづれも活字にして發表したものではない。

第一章

標題が『かなづかひ』でなく『かなづかい』となつてゐるのは所謂現代假名遣のことだからである。著者は現役の國語教科書調査官。現代假名遣を正統だと主張しなければならぬ立場だ。しかし書名からすると、心底さう思ひこんでをられるらしい。ただ假名遣入門と言ふからには、現代假名遣の外にでなくてはならない筈だ。方法的に問題だと思ふのみ。少し敷衍する。

べしとした。その流儀に従へば關係代名詞は *that* と綴るのが本則で、せいぜいが *that* でも許容されるといふことになつたはずだ。

表音的表記の理想とするところは一字一音。ローマ字で *z* と書くところを *ツ* と *ズ* と書き分けるなど以つての外と字母を制限したのだけれど一部に歴史的表記を許容した。稻妻がその例である。戦前ならイナヅマ、戦後はイナズマとしたが、昭和六十一年の變更でどちらでもよいことにした。戦前なら正書法があつたのに對し戦後はどう書いてもよくなったことを象徴する例である。現代假名遣には、この語は斯く書くべしといふものはなく、只幾つかの字母に制限を加へたに過ぎない。

『コンサイス英和辭典』で *that* を引くと最初に指示代名詞としての説明、次に關係代名詞として説明といふ二つの項目をまとめた形になつてゐるのであるが、指示代名詞の場合の母音は *hat* のそれであり、關係代名詞の母音は *hut* のそれであるとの説明がそれぞれの冒頭にある。イェスペルセンによれば十九世紀初頭に「オテルは指示代名詞を *that*、關係代名詞を *thut* と區別することを提唱した。實際、指示代名詞の場合、複數形は *those* であるが、關係代名詞ではその變化もないのであるから、この發音の異なる二語を綴りの上でも區別するのはまったく正統であつたはずだ。

勿論この場合、指示代名詞の母音は強

母音であり關係代名詞の母音は弱母音であると言つてもよいのであるが、「むつかしい」と「むづかしい」と、一方が一方の濁音であるといふ關係を斟酌せず、我國の役所は後者を「むずかしい」と書く

表音的假名遣にしたつもりが、長音なるものの表記でつまづいた。たとへば高村外務大臣と小村壽太郎とをへボン式でかけば *Komura* と *Komura* と區別できない。しかし外務省は、のマクロンを外したものをへボン式と稱する。高村大臣は高名な先祖を持つことになつた。歴史的表記の轉寫であれば *Kaamura* と *Komura* と區別できたのに戦前のローマ字論者は端から歴史的假名は缺陷だらけとみてしまつてゐたのだ。

我國では英語の綴りに重きをおかず音聲については發音記號やカナ表記でみなければならぬとする。あたかも英語の綴りは歴史的表記であつて不合理だとしてゐるかのやうだ。綴りと音聲を切離して二度手間て教へるのだから我國の英語教育の效率が悪いのは當然だ。なほ、英語の場合のカナ表記では四假名を書き分ける。たとへば書名にキッズ用と謳つた英和辭典。このキッズは *kids* つまりキッズの複數形。本文の發音部分ではキッズ

となつてゐること請合だ。ツズ、ヂジの書き分けを不要としてタ行字母の使用を制限したのだが、表音といふ點では逆にすべきであつた。英語教師は面従腹背をせざるを得ないのだ。

表音的表記は言語學的意味での方言が対象である。或る辭典で with の發音が十四通りもあつて話題になつたことがあつた。昭和二十一年の「現代かなづかひ」では、方言で發音しむるところは四假名や合拗音を書き分けてもよいことになつてゐた。いまでは外來語の流入によつて四假名以上の書き分けが必要になつてゐるのだから、戦前の書き分けでも足りなはずだ。

外來語のこと、假名漢字變換のこと、ローマ字のこと、それから英語教育における假名表記のことまで視野に入れて論じて欲しい。假名遣ひは英語の場合と異なると言ふかも知れない。違ふなら、その違いを説明して欲しい。また百歩譲つて、歴史的表記が不合理であるが故に捨ててよいとした場合、新しい表記はこれからの傳統の第一歩として位置づけられるのであらうか。それとも傳統などは常に捨てられるべき宿命にあるのであらうか。『かなづかひ入門』といふ標題は、少なくとも新たな傳統の始りだとする意識があるからであらうが、表音的表記が時代を超えて生きつづけるとするのは定義上無理がある。

點に於て、語を基準とする假名遣とは通ずる所があつても、音を基準とする表音的假名遣とは性質を異にするものといはなければならぬ。」と述べてゐる。

英語の場合の『現代假名遣入門』ほどのやうな形になるであらうか。關係代名詞の that を that と書換へてしめしめ、この二つを關聯づけるすべはない。表音的表記では表記法自體を論ずることは出来ないのだ。歴史的表記は、發音の變化を綴りの解釋規則として織り込むことができるので、自らを論じることができぬ。冒頭、現代假名遣の外にでなければならぬと述べたのはこのことであつた。いや、この場合の th は thin の th と異なり有聲音であるから th とすべきであらう。B L ウォーフは th のままで有聲音と無聲音の二つを表す一見不合理な表記にも僭在的文法があるといふ。テレビドラマ「あんどーなつ」の第一回は鬼燈なる菓子が主題。この表記が「ほづき」と「ほおずき」とぶれてゐた。恐らく前者は長音のつもりで三音節に發音し、後者は「ほ」と「お」を分けて四音節に發音するのであらう。戦前なら「ほほづき」と決まつてゐた。語中の八行音はア段でのみ兩唇半母音の互り音として實現される區切り符號だと見ればこのままで何の問題もなかつたのである。

歴史的表記を放擲して傳統を斷つたことが如何なる事態を招來してゐるかについては贅言を要しまい。せめて外國人の日本語ローマ字表記に資するところがあるかと英語ウィキペディアの議論を讀むと、アメリカ人は後者を三音節、前者を四音節と逆に見てゐるのである。混乱だけが残つた。

橋本進吉は『國語と國文學』第十七卷第十二號所載の「表音的假名遣は假名遣にあらず」で「歴史的假名遣及び表音的假名遣の名は、英語に於ける歴史的綴字法 (historical spelling) 及び表音的綴字法 (phonetic spelling) 法から出たもので、假名遣を綴字法と同様なものと見て、かく名づけたのである。然るに綴字法は歴史のものも表音的のものも、共に語の書き方としてのきまりであつて、かやうな

國語表記がこのやうに變化したのであるから、國語の教師たるもの國語音韻史は必修でなければなるまい。ところが中學校の國語科教諭は音韻史はおるか國

語學概論も古典文法も現代語文法も必修ではないといふ。小學校の先生は原則として全教科を擔當するが一科目の教科教育法さへ履修すればよく國語科教育法を學んだ人とは限らない。英國では表記改革運動が行政によつて暴走することはない。なにが正しい表記かは慣用で決まり、それは『オックスフォード大辭典』を始めとする辭書で確認することができる。我國では國語審議會の答申のつど辭書は改訂されねばならず、教員は文化廳の『言葉に関する問答集』を見たり、役人の書いた本を参照するなど、いはば條文を読むことが求められる。古典についての知識など教員の資格にとつては邪魔になるだけだらう。教員が單なる利權集團に化しやすい所以だ。

(平成二十年七月二十六日)

第二章

冒頭に

本書では、告示そのものを指す以外は、「現代假名遣」で統一することとする

とある。一つの見識ではあるだらう。結論を先取りするやうであるが筆者は逆に書名はじめ引用部分も歴史的假名遣にする。なほ、現代假名遣なるものはないと考へるので、所謂と冠するところであるが煩を厭つて省く。

さて、著者は歴史的假名遣については學問的合理性があり、現代假名遣にはないといふとされてゐることを踏まへて學問的合理性に重きをおくべきではなく、現代假名遣にも學問的合理性を認める餘地があるのだといふ。その口ぶりが面白い。一部の學者が學問を武器に發言するから、「あたたかも説得力がありさうであり」と書く。何故、ザッハリッヒに「説得力があり」と

書かないのか。説得力があつても間違つてゐるのなら、その所以を書けばよい。ところが、せいぜいが、「現代假名遣に合理性が缺けてゐるとは、わたしは思はない」と託宣を垂れるだけだ。サブリミナルな効果を狙つた書き方になるのは、さう書けないからなのだらう。實際、著者の主張はどうもはつきりしない。要するに歴史的假名遣も現代假名遣も學問的合理性で優劣を言ふべきでなく、すでに定着した現代假名遣で善いではないかといふことにつきるやうだ。サブリミナルな効果を狙つたと感じられる表現の例は多いが、歴史的假名遣を「おちいさんたちの假名のつかひ方」と呼ぶことは、それが過去のもので捨てられるべきものだといふ文脈であるだけに、「後期高齢者」より底意地の悪さを感じるのは筆者だけではない。あるまい。

昭和二十一年十一月の内閣告示について著者は次のやうに書く。

明治以來つづけられてきた、つかいやすく眞に言語生活に活きた假名遣創設への専門家の努力、それがやうやく、口やかましい保守派文化人の戦後チャーナリズムからの撤退によつて、日の目をみたのであつた。

「眞に言語生活に活きた假名遣」もサブリミナル効果のための表現だ。さて、告示の細則第四、第八、第九が助詞の「は」「へ」「を」は例外規定。筆者は助詞の場合も發音通り「わ」「え」「お」と書くやうに教はつた世代。これは著者の表現によれば、發音忠實主義に基づく純粹表音假名遣。これが實際に教室で行はれたことは著者はご存知ないのかも知れない。助詞を特別扱ひすることに觸れて次のやうに述べたところがある。

學問的に正しかったはずのこの規範假名遣は、結局、普及しなかった。「現代假名遣」が文部省公認の假名遣であり、正しいはずの「純粹表音假名遣」が少数派であったことによるのであらうが、普及しなかった原因は、正しいはずの假名遣そのものの内部にもあった。つまり、原理原則を通さうとするあまり、世間の慣習を無視したためである。たとへば、さきの例で、助詞のワを「は」と表記するのは、日本人のあいだでは完璧に定着した慣習である。これを發音通りに「わ」と書くことは、大半の日本人の生理が受け付けない。おそらく、現代假名遣を制定した學者たちは、さう判断したに違ひない。わたしは、この判断を正解だつたと評價する。

細かい點であるが、規範假名遣といふことが理解できない。規範は假名遣の屬性ではない。規範的は記述的に對應するもので適應の問題のはずだ。假名遣自體の優劣を論じる場合は捨象すべきものだと思ふ。また生理を持ち出すことも判らない。言語の問題であれば内省といふべきところではないか。

さて、以上のことをおいて言へば、盗人猛々しい言ひ分だと思ふ。生徒は表記に關して白紙。定着した慣習などあるべきはずもないではないか。義務教育で始めて教へるのだから最適だ思つたことを行つたのではなかつたのか。戦後のどさくさにチチもババもあらゆる先輩がそれまでの知識を否定されて泣いたのである。

四假名に關しても不徹底であつた。表記のゆれといふことが言はれるが、ローマ字表記になれば解決すると踏んでのことであつたのではないか。ローマ字では助詞は分かち書きして發音通りに書くこと

教へてゐるはずだ。現代假名遣なるものの論理的歸結を知るにはローマ字に轉寫するのが判りやすい。以下ローマ字を用ゐる場合は擴張へボン式とする。従来のローマ字と異なり翻字式であるからである。要綱を示せば次のとおり。

子音は英語的、母音は大陸的。四假名は(ジ||チ||ス||ツ||ン)とする。語中の促音は後續假名字母の父音すなはち假名字母の行のA段子音とする。*chi*は夕行なので*chi*は夕行なので*chi*となる。但し八行の場合でU段であれば「*chi*」さうでなければ「*chi*」とする。八行轉呼音つまり語中の八行音は區切り符號とみて()で表す。八行轉呼音もワ行子音も視覺の意味しなく、A段でのみ兩唇半母音の渡り音として實現する。*an*は *autumn* のそれに等しく、*en*は *Europe* のそれに等しい。これは八行轉呼音の存在を妨げない。手薄などは *te-usu* のやうにする。なほ「買ふ、緬ふ、這ふ、舞ふ、や、煽く、倒れる」などは *a* と *o* が別に發音されるがこれは語幹の意識が働くためだと考へられる。また「天を」なら *ten-wo* としなければならぬ。勤王 (*kinwau*) のやうに撥音が聯聲になる場合との區別のためである。

なほ、筆者の假名漢字變換はこの方式であり、*chi* で *テイ*、*si* で *スイ*、*chi* で *チ*、*si* で *ズイ* となる。

歴史的假名遣と現代假名遣

さて、著者は歴史的假名遣と現代假名遣について次のやうに言ふ。

現代假名遣でなければ口語文でないとか、歴史的假名遣でなければ文

語文とはいはれない、といふやうなものではない。ましてや、現代假名遣でない口語文は書けないなどいふものではない。口語文は歴史的假名遣でも書ける。歴史的假名遣で書いても、口語文は口語文である。なによりも「現代假名遣」ができる前、すなわち明治・大正・昭和十年代までの普通の日本人は、歴史的假名遣でしか口語文を書かなかった。

(中略)

同じ理屈で、文語文が現代假名遣で書かれたとしても、どこにも都合はない。つまり、歴史的假名遣が文語文専用のものではないのと同様、現代假名遣も口語文専用のもではないからだ。

そして萬葉集、古今集、源氏物語、芭蕉・西鶴について次のやうに書く。(芭蕉・西鶴の間の中ボツは原文にはない。)

萬葉集 假名文字では全音節が表記できない。歴史的假名遣は次善の策
古今集 歴史的假名遣が適用できる。發音と假名文字が正確に対応してゐた。

源氏物語 「シ・チ」「ス・ツ」以外は現代假名遣で書くはつが歴史的假名遣よりも實體に近く、かつ合理的。
芭蕉・西鶴 現代假名遣がこの時代の發音にもっとも近似の表記。

萬葉集の場合に假名文字では全音節が表記できないとするのは、所謂上代特殊假名遣のことがあるからであるが、甲乙の書き分けが音の問題であったのか、またさうだとしてもどのやうな違ひであったかは不明。歴史的假名遣しか方法はなく、かつ歌の歴史においてはそれで十分であったはず。わざわざ「次善の」と形

容したところに歴史的假名遣を何とか認めようとする著者の心根が窺へる。

古今集については歴史的假名遣で適用できるとあるが、まるでその他の、つまり現代假名遣も適用できると言はんばかり。もちろんそんなことはできない。發音と假名文字が正確に対応してゐたとあるが本當だらうか。第一に清濁を書き分けてゐない。また、八行轉呼音や、ワ行音は確かに独自の音を表してゐたのだらうか。たとへば喜撰法師の歌では「憂し」と「宇治」とが掛け詞。つまりシとチが通じてゐた譯であるから、發音と假名が正確に対応してゐたとは言へないのでなからうか。しかし、さう言つておかなければ、歴史的假名遣が時代に合はなくなつたと言ふことができなくなることは確かだ。

さて源氏物語の場合であるが、「シ・チ」「ス・ツ」以外は現代假名遣で書くとはどういふことか。それでは現代假名遣ではあるまい。それから「實體に近い」とはどういふことか。桐壺の冒頭を擴張入ボン式で轉寫してみると十分實體に近いといふことになるのであるまいか(メルマガ『頂門の一针』第一一七六號参照)

Idzurenno o'ontokinika, nyungo,
kauri amata sabura'itama'ikerunakani,
itoyangotonakiki'ani'a aranunga, sugu-
rete tokimekitama'u arikeri.

芭蕉の句を擴張入ボン式で二つの表記を轉寫すれば

(ㄚ) furuikeya ka'adznu tobikomu midznu-
no oto
(口) furuikye ya kawaznu tobikomu mizu
no oto

となる。ズ・ツの音に違ひがなくなつたからといって、現代假名遣式にすべからくツをズとしてしまふと、打消しの助動詞「ず」との區別ができない。書き分けは音の問題だけではないわけだ。(口)の場

句「土池や買はず飛び込む見ずの音」と
でまなつてつ井ぶだつ。

西鶴『好色一代男』の冒頭なび

(下) sakuramo chiruni nageki, tsuki'a
kagiri arite irisayama, kokoni taji-
manokuni kanehoru satono hotorini,
ukiyonokotowo hokaminashite, shikidan
futatsuni netemo sametemo yumenno-
suketo

(口) sakura mo chiru ni nageki, tsuki wa
kagiri ari te irisayama, koko ni tazhima
no kuni kanehoru sato no hotori ni,
ukiyo no koto mo hoka ni nashi te shiki-
dou futatsu ni nete mo samete mo yume
no suke to

かじ見てくると著者の主張とは反対に
萬葉から芭蕉・西鶴に到るまで全て歴史
的假名遣で表記でき、現代假名遣で表記
できないことが解る。著者の方法とは逆
に歴史的假名遣で書く以外にないのであ
る。そして現代はジヂ、ズヅの書き分け
でも足りないことは周知の通り。つまり、
萬葉から現代まで歴史的假名遣で書くこ
とができ、現代假名遣で書くことができ
ないのだ。
以上でをはりであるが、著者の用語に
ついて觸れておきたい。

眞假名とは

一般には萬葉假名といふところを著者
は眞假名と言はれる。假名は眞名(漢字)
に對する語。漢字と異なり單に音を表す
に過ぎない符牒のことだ。眞假名は *oxy-*
moron (形容矛盾)。眞假名と言はれて何
のことが解る人はあるまい。強いて意味
を忖度すれば「を」だ。ヲは助詞の場合に
しか使用が認められてゐない。これでは
本来の假名ではない。語を表してゐるの
だから眞名的假名といふことになる。筆
者は助詞の場合もオと書くやうに教はつ
た世代だ。助詞の場合にヲの使用が認め

られたのは何時であつたか記憶にない。筆
者の口座の名義の振假名にヲが使用可能
になつたのは今年の六月だ。戦後導入さ
れた新表記體系が未だディバッグ中であ
ることが解る。

ローマ字轉寫の場合、この眞名的假名
はむじするのだらうか。擴張ハボン式は
翻字式なので假名が助詞であるかどうか
には關係ない。しかし従來のハボン式や
日本式では *wo* や *ha* のままでは讀みにく
い。ローマ字論者は分かち書きして。と
か *wa* とか書くのが普通。著者はローマ
字は純粹表音假名遣だと貶すのであらう
か。西鶴の『好色一代男』の轉寫例(口)
を参照されたい。

アーサー・ケストラーは『機械の中の
幽霊』でホロンといふ語を提唱してゐる
が、まったく新しい觀念であつてさへ新
語の提唱にはかくも慎重でなければなら
ぬのかと驚嘆したことを覚えてゐる。語
は餘程のことがない限り典據のあるもの
でまかなふべきだ。無用な造語は言語空
間の汚染と言つてもよいだらう。とくに
著者のやうな立場の人には慎重であつて
欲しい。漢字の筆畫を略して新字體を設
けたことが今となつては一種の汚染であ
ることは誰もが認めることに違ひない。

コペルニクスの轉換點

著者は假名遣の變化は音韻變化の結果
であるとの知見を以つてコペルニクスの
轉換點となす。確かに、上代特殊假名遣
の發見はこのテーゼによつて音韻變化を
歴史的事實とした。しかし、音韻變化は
そんなに短期間に起るものなのであらう
か。むしろテーゼを疑つてもよいのでは
ないかといふ氣がする。現に昭和二十年
代に日本語の假名遣は大きく變つたけれ
ど、筆者にはこれが音韻變化の結果だと
は思はれない。單に表音主義者が權力を
握つて暴走したためだと思ふ。また萬葉假

名では清濁が書き分けられてゐたが、古今集では清濁が書き分けられてないのは、平安時代になって清濁の發音の區別がなくなつたといふわけでもないだらう。

著者はコベルニクスの轉換點でなく天動説と地動説の違いだと言はれる。歴史的文脈を離れて言へば天動説も地動説も記述の問題。歴史的假名遣を惡魔的と呼ぶのはその意味で天動説的理解のせいかも知れない。蝶々をテフテフと書く場合でも Europe の eu で覆ふことができるのだ。八行轉呼音が複雑だからと排除したつもりでも助詞の「は」「や」「へ」のローマ字表記を視野に入れると未解決であることが解るはずだ。

(平成二十年七月三十一日)

第三章

平凡社『月刊百科』三月號所載の白石良夫「歴史的假名遣は美しいのか」「かなづかい入門」批判を駁す」を読んだ。『かなづかい入門』(平凡社新書)のことは、昨年七月二十二日の會で上村さんから現代假名遣を古文にも及ぼす主張のものと聞いたのが最初。それで一文草したのが二十四日。讀んでから書いたのが二十七日。「批判を駁す」を讀んで三度目を書く。

氏は「否定的批判に對しては反論するつもりで手ぐすねひいてゐた」のださうだ。念のためお断りするが、當方は引用する際も支障のない限りは原文の表記にはこだはらない。漢字も可能な限り戦前の字體を用ゐる。つまり正字正假名遣で書く。これは氏の古文をも現代假名遣で書くといふ態度と對蹠的だ。(拗促音の小書きは残した)

アマゾンにはカスタマーレビューとして、讀者の評価文がある。點數は星の數。滿點は五つだ。同書に對する評價文が二本。駄本と斷じるもの(イ)、長年のモヤモ

ヤが晴れたが、その方面に詳しくなく、著者の學問と論理がただしいかどうか檢證できないからと星四つとしたもの(ロ)、それから星五つとしたもの(ハ)だ。

氏は(イ)について、紹介文と目次をみただけで拒絶反應を示すタイプで、大半は歴史的假名遣を「傳統的な正假名遣」と信奉し、現實に實踐もしてゐる人達なので讀んでくれるだけでもましなのが、氏の著作は彼らを怒らせはしても納得させることはできず、長年にわたつて持ち續けてきた信念は、氏の論理ごときで揺らぐものではないとされる。

(ハ)については、氏と同じ見解の人とした上で、必ずしも確信がなく、他人に説明することの出来なかつた人が安心感を得たはずだとする。

最後に氏は(ロ)について、「現代假名遣がけつして非合理的なシステムでないことを知らしめた。啓蒙を旨とした拙著が實現したいと願つてゐたのは、かういふ讀者の獲得であつた。」とする。また、歴史的假名遣を投稿規定とする俳句雜誌に表現の不自由を感じてゐたといふ讀者からの書状を紹介して、次のやうに書く。

「假名遣」は、あくまでも實用のための人爲的なルールである。であるから、散文はいざ知らず、一字一句を練磨させることによつて成立する詩や短歌や俳句が、書くときはただの社會生活上のルールにあはせませうといふのではをかきな話であらう。そんな規則からもつと自由なのが、文學としての表現であるべきではないのが。

「一字一句を練磨させる」といふ表現には少し驚いた。「練磨する」といふところだ。「そんな規則からもつと自由」といふところ、「もつと」が餘計に感じられる。英

語の比較級を下敷きにしたのかもしれない。「文學としての表現であるべきではないのか」、これについては當爲でなく「文學としての表現ではないのか」でない」と主張として弱いと思ふ。

氏は否定的批判が出盡くしたとは思へないが、おほよそのパターンが讀めてきたので、そろそろ反撃を試みたいとして次のやうに書く。

批判の誤解の多くは、わたしを歴史的假名遣否定論者と見なしてあるといふ点である。現代假名遣を認めるか認めないか、歴史的假名遣を認めるか認めないか。一方を認めることは、他方を否定することを意味する。そんな短絡的論理でわたしを攻めてくる。

確かに、わたしは、歴史的假名遣が現代人の言語生活に不便で不向きなものだとは言った。信奉者が思っているほどの傳統ある規範ではない、とも言った。學問的根據にもとづいた表記法でありながら、多くの架空の表記を歴史的假名遣はしなければいけない、といふ事實も言った。學問的根據あるゆゑに、表記の基準がころころ變る、とも言った。字音假名遣は近代の日本人を苦しめた、とも言った。だが、わたしは、歴史的假名遣が正しいか正しくないか、といふふうなことは慎重に言はなかつた。現代假名遣についても、そのやうなことは言はなかつた。

なぜか。

それは、現代假名遣にしる歴史的假名遣にしる、さらに契沖假名遣も定家假名遣も、じつはどれも正しい假名遣だからである。といふと混乱しさうなので、言ひ方を換へると、

カンガヘル(考)を現代假名遣で書けば「かंगाえる」が正しく、歴史的假名遣で書けば「かんがへる」が正しい。ヲシム(惜)を定家假名遣で書けば「おしむ」が正しく、契沖假名遣で書けば「をしむ」が正しい。

といふことになる。假名遣といふ規範(制度)そのものは、正しいとか正しくないとかいふ次元で議論するものではない。拙著の帯の「考へる人」は「考える人」より偉い?」は、私の考へたコピーではないが、「えらい?」が「ただしい?」でないところに「假名遣」の意味を實に的確に理解した秀逸さがある。

したがって、歴史的假名遣論者がよく口にする「正假名遣」なる語は、假名遣といふ思想がもつてゐる本質・機能と矛盾する名稱である。

亂暴な書き方だ。多分「的確に理解した」のところは「的確に表現した」のもりだらうし、「假名遣といふ思想がもつてゐる本質」は「假名遣といふことの本質」といふほどの意味のはずだ。更に、かう續ける。

現代假名遣のほうか、完璧とはいへないが、現代社會の文字生活に適してゐるといふことを言ひたかつたのである(完璧でないといふなら、歴史的假名遣もさうである)。

現代假名遣は完璧であるとはどうしても言へない。それで歴史的假名遣を「きおるさうと苦心してゐるわけだ。」と「おしむ」氏に對する批判には、體言の假名遣に偏つてゐて、用言の問題にふれてゐない、といふのがあつたらしい。しかし、

この手の批判の意味がなんとなく理解できたのは、かれらが假名遣問題を論じるとき、あたかもバイブルのごとくきまつて持ち上げる『私の國語教室』（福田恆存氏著）を、遅まきながら読んでからである。

とあるのには心底驚いた。氏は『私の國語教室』を讀まずにあの本を書かれたのだ。實は私も讀んだとは言へない。同人誌『聲』を丸善の本の圖書館で讀んだけれど、職業上の制約もあり、なんとか現代假名遣を身につけるべく努力したものだ。と言つても歴史的假名遣實踐者をやめて現代假名遣を身につけようとしたのではない。假名遣といふものを體系的に身につけようとしたといふだけのことだ。當然のことながら、それが現代假名遣であつたにすぎない。しかし現代假名遣なるものを體系として身につけるのは無理だといふことはすぐにわかつた。だからと言つて歴史的假名遣に切替へることは仕事の上で許されなかつたし、まがりなりにも現代假名遣で育ってきたものにとつて歴史的假名遣に切替へるのは徳劫だつた。實際に切替へてみたら存外簡單であつたのであるが、それが解つたのはつい最近のことだ。

だから歴史的假名遣に切替へたのは定年後何年も経つてからだ。もし、『私の國語教室』を丁寧に讀んでいたら、もっと早く、少なくとも定年後すぐに切替へた筈だ。しかし、氏のやうに歴史的假名遣を批判する場合なら、眞つ先に讀んだだらうと思ふ。讀まずに書いたとは度胸があるかもしれないが學者の態度ではないのではないか。

氏は、『私の國語教室』の用言のところ、とくに八行動詞のところの記述を讀んで、そのことなら自著ですでに批判に答へてあるとして歴史的假名遣による説明に對

して次のやうに書く。

たしかに、右のやうな説明は、無駄がなくて美しい。だが、これが美しく見えるのは、假名が活用してゐると見なすからである。と、かう言へば、柔軟な頭の持主なら、歴史的假名遣による活用の説明が大變な筋違ひであることに氣づくであらう。さう、日本語の動詞や形容詞は、間違つても假名が活用してゐるわけでないのだ。假名は發音を寫す記號に過ぎない。假名および假名遣は、活用とは關係がない。

しつこく繰返すやうに、規範假名遣といふものは、人工的につくられたルールである。それも、發音と關聯づけた假名のつかひ方のルールであつて、文法を説明するために作られたものではない。現代假名遣もしかり、契沖假名遣もしかり、定家假名遣もしかり。歴史的假名遣も例外ではない。

とにかく、活用が歴史的假名遣で美しく説明できることが口惜しくて仕方がないらしい。こんなところもある。

問題は、千年も前の言語現象でもつて、その間おほきく變化した日本語の「現代」を説明することが、美しいことなのか。さうわたしは言ひたい。そして最後に近著で引用古典を現代假名遣で書いた實驗について觸れて次のやうに述べる。

技術的な面での問題はなかつた。ただ、馴染まないといふ感觸は若干あつた。

なぜ馴染まないと感じたのか。それはおそらく、歴史的假名遣に馴染

んだ古典研究者のわたしの、肌染
み附いた慣習のゆゑであらう。規範
といふものがいかに、理屈ではなく
慣習に拘束されやすい一面をもつか
を實感した。

それと、馴染まなかつたもうひと
つの原因を、わたしは考へた。それ
は、引用がどれも、古典の文章、あ
るいは古學者の書いた擬古文だつた
からだと思ふ。すなはち、これらは
契沖假名遣が対象とする言語で書か
れてゐる。契沖假名遣は、古代語表
記のための規範であつた。(中略)
この理屈を逆轉させてみる。さう
すれば、古代語表記のための規範假
名遣の原理をそのまま引き繼いだ歴
史的假名遣は、現代語表記の規範と
するにはあまり適してゐない、とい
ふことがわかる。これが實驗から得
た教訓である。

たのは好みの問題でもあるが、時計數字
は文字化けすることがあるといふ事情も
ある。我々は(イ)に屬すると看做され
るはずだ。

取り上げなかつたが「ネットでの拙著
へのコメントも、どうやら一段落ついた
やうである」といふところがあつた。ネッ
トでいろいろ検索しておいでらしい。し
かし(イ)に屬するものは最初から無視
と決め込んでをられるのではないだらう
か。冒頭引用した(イ)についてのここ
ろは「彼らの批判はわたしを怒らせはし
ても、納得させることはできない。長年
にわたつて持ちつづけてきたわたしの信
念は、彼らごときの論理で揺らくもので
はない」との告白であつたのだ。

(平成二十一年四月十三日)

理屈を逆轉させれば理屈でなくなる道
理。氏の言ふところの現代假名遣は助詞
「よ」を書くことができないといふ一點に
おいてだけでも古文を表記することはで
きないわけであるが、歴史的假名遣には
そのやうな制限がないのだから、勿論現
代語を表記するのに問題はないのだ。

定家假名遣、契沖假名遣とならべるこ
とで歴史的假名遣の萬古不易でないこと
を印象づけ、以つて現代假名遣と一般で
あることを主張する方法が繰り返し用ゐ
られてゐるが、定家假名遣にしろ契沖假
名遣にしろ時代を超えて通ずる據り所を
求めた結果のもの。現代假名遣とはまっ
たく異なる。こんな誤魔化しの論法で世
をまどはすのは犯罪だ。

以上、白石氏の駁論の紹介までに一筆
致しました。

イロハを用ゐて書いたところ、白石氏
はイロハでなく時計數字(ローマ數字の
大文字)を使つてをられる。イロハにし